

ピナ・バウシュ、ウィリアム・フォーサイス、イリ・キリアン等々、常に世界のダンス界において最前線に立つ才能を見せてきた彩の国さいたま芸術劇場に、また新たな顔ぶれが登場する。ヤン・ロワースとサシャ・ヴァルツ。この2人は今、ヨーロッパでも最も注目されているアーティストだ。2人の創造の源とは何か。昨年ヨーロッパで行われたインタビューから、創作の現場のエキサイティングな様子が伝わってくる。
文・佐藤友紀(ライター)



ヨーロッパで最注目の2人が相次いで上演!

ヤン・ロワース&ニードカンパニー

『イザベラの部屋』 Jan Lauwers & Needcompany 『Isabella's Room』

ヤン・ロワース&ニードカンパニー
『イザベラの部屋』(日本語字幕付)
古代エジプトやアフリカの発掘品、骨董品にあふれた部屋に暮らす盲目の老女イザベラ。彼女は20世紀のほとんども生きてきた。第一次世界大戦、第二次世界大戦、ヒロシマ、植民地主義、ジョイスやピカソらのモダン・アート、月への有人飛行、デヴィッド・ボウイの「ジギー・スターダスト」……。9人の俳優、ダンサー、ミュージシャンが激動の20世紀を辿りながら、彼女の生涯を語り、歌い、踊る。ダンス、演劇、音楽が混交したヤン・ロワースならではの舞台表現によってうたいあげられる死を通しての生への情熱。ヨーロッパでは、ヤン・ファールと並び演劇の改革者として高い評価を誇るベルギー・フレイミッシュ・パフォーマンス・アーツ界の旗手の一人ヤン・ロワース&ニードカンパニーによる初上陸作品です。
【日時】4月6日(金) 開演 19:00
7日(土) 開演 15:00
8日(日) 開演 15:00
※6日の公演終了後、演出家によるトークを行います。
【会場】彩の国さいたま芸術劇場 大ホール
【演目】『イザベラの部屋』(2004年初演)
【構成・演出・舞台美術】ヤン・ロワース
【テキスト】ヤン・ロワース、アネーケ・ボネマ『嘘つきのモノローグ』
【音楽】ハンス・ベター・ダー、マールタン・シーゲルス
【歌詞】ヤン・ロワース、アネーケ・ボネマ
【出演】俳優、ダンサー、ミュージシャン 10名
【チケット(税込)】発売中
一般S席6,000円 A席4,000円 学生A席2,000円
メンバーズS席5,400円 A席3,600円

『クリエイションにジャンルの垣根はない』

「これまでもヤン(・ロワース)とは一緒に仕事をして来たけど、やはり『イザベラの部屋』は彼にとっても特別な作品なんじゃないかしら。確かにタイトルロールは私が演じているわよ。でも『ボヴァリー夫人』の作者フロバールが『ボヴァリー夫人は私だ』と言ったように、『イザベラの部屋』にはヤンの個人的な想いがいっぱい詰まってるの」
こう語るのはベルギーのベテラン女優ヴィヴィアンヌ・ド・ミュイック(右はイザベラを演じるミュイック)。ヤン・ロワースが主宰するニードカンパニーの一員としてパフォーマンスをする時は若手メンバーに負けない弾けっぷりを見せるのに、「この作品と180度テイストの異なる『ヴァギナ・モノローグ』の演出も手掛けているわ。ヤンはカンパニーのメンバーのこういう多様な活動の仕方をちゃんと認めてくれるのよ」。



ヤン・ロワース

1957年アントワープ生まれ。アントワープ美術学校で学んだ後、79年にアート集団エビゴネンアンサンブルを結成。このアート集団は81年にエビゴネンシアターと改称した演劇集団となり、相次いで発表した演劇作品6作により演劇界に旋風を巻き起こした。85年にエビゴネン・シアターを解散し、翌年(86年)、ニードカンパニーを創立。暴力、愛、エロティシズム、そして死をテーマに、演劇とその意味を問直す革新的な舞台表現によって、国際的な評価を得る。



それはヤン・ロワース自身、「表現には何でもあり。アプローチの仕方もいろいろあっていい」という考え方をしているからだろう。7年前にはウィリアム・フォーサイスの依頼でフランクフルト・バレエ団と共同制作をしたり、映像作品も数多く生み出しているのは、「クリエイションにはジャンルによる垣根などないと思う」というロワースの姿勢に合致。しかもダンスや歌が効果的に織り込まれた舞台作品は、テキスト(台本や台詞)が薄いことも少なくないのに、イザベラ役ミュイックをして、「その途方もないイザベラの“旅”の描写には、台詞を喋る私自身が感動してしまうくらい」だとか。この作品、実験演劇とカテゴライズされるようだが、こんなにエキサイティングで先が読めない実験なら、つい客席から参加したくなる。

『そもそも身体とは何か』を探求

一方、シューベルトの音楽を用いてリヨン国立バレエ団に振付けた『ファンタジー』のような振付作品こそ、ボツンボツンと日本でも紹介されてきたドイツの女性振付家サシャ・ヴァルツ。99年~04年はベルリン・シャビューネ劇場の共同ディレクターとして活躍してきたが、「子供たちの教育も含めたいろんな新しい才能と仕事をする中で、これまでになかったインスピレーションをもっと得たい。その意味ではこれを日本の観客に味わっていただけるのがとてもエキサイティングなのよ」と、近年の代表作の一つ『Körper ケルパー(身体)』の日本公演を心から喜んでいる様子だ。

スペイン・バルセロナで観た『Körper ケルパー(身体)』は、国籍も身体つきもダンス・スタイルも微妙に異なる13人のダンサーたちが繰り広げる「人間の肉体とはいかなる可能性を秘めているのか? いや、そもそも身体とは何か?」という大命題に対する公開アプローチ。「私自身、ダンサーとして踊ったり、早い時期から友人たちに振付けたりするうちに、人間の身体の機能や奥深さがわかっていくのかと疑問に思ったの。一つ一つのパーツとして考えれば

生物学的なのに、そこに何らかの感情やパッションが生じると、身体はその人間の心の内側の叫びを響かせる楽器のようなものになる。それと、ダンスにおける重力についても考察してみたかった。ガラスの壁で囲まれた狭い空間にダンサーたちがごめく様子は、見ようによっては顕微鏡で観察されている微生物のようだったりするけれど。(笑い) スローモーションという動きの技術が、不思議な次元の表現形態を生み出し、より細かに身体を感じるきっかけになるんじゃないかしら」

「ドイツ、いやヨーロッパでダンスや演劇に関わる仕事をしていて、ピナ・バウシュの影響を受けていない人間なんていないわ。(笑い)」というヴァルツ。『Körper ケルパー(身体)』にもどころどころピナ風のコミカルなスケッチが登場するが、そのテイストはあくまでも別物だ。「振付家としての私のキャリアの初期の頃から一緒に作品創りに参加してくれた日本人ダンサーのタカコに代表されるように、仲間との信頼関係、絆が、どんな挑戦も可能にしてくれていると思う。『Körper ケルパー(身体)』から始まる三部作の『S』『noBody』もぜひ観ていただきたいわ」
『Körper ケルパー(身体)』の世界を味わったら、自然にその要求が湧き上がるはずだ。

NEW サシャ・ヴァルツ&ゲスト
『Körper ケルパー(身体)』

ピナ・バウシュに次ぐ世代を代表するドイツの振付家サシャ・ヴァルツが、ベルリンのシャビューネ劇場の芸術監督時代に創作した代表作『Körper』、『S』、『noBody』と続く『身体』三部作の第一作目として世界的な評価を確立した作品の待望の上演です。

【日時】7月28日(土) 開演 15:00
7月29日(日) 開演 15:00

※28日の公演終了後、振付家によるトークを行います。

【会場】彩の国さいたま芸術劇場 大ホール

【演目】『Körper ケルパー(身体)』(2000年初演)
【演出・振付】サシャ・ヴァルツ
【チケット(税込)】
S席6,000円 A席4,000円 学生A席2,000円
【発売日】メンバーズ 4月1日(土) 一般 4月7日(土)
※8月4日(土)に滋賀県立芸術劇場 びわ湖ホール 中ホールにて公演あり(開演14:00)。

サシャ・ヴァルツ
1963年カールスルーエ(ドイツ)生まれ。アムステルダムとニューヨークでダンスと振付を学ぶ。1993年にサシャ・ヴァルツ&ゲストを結成。1999年から2004年までシャビューネ劇場(ベルリン)のアーティスティック・ディレクション・コミッティーの一員を務め、『Körper ケルパー(身体)』、『S』、『noBody』の3部作を創作。高い評価を受ける。サシャ・ヴァルツ&ゲストは、2004年には再びインディペンデントなカンパニーとなり、旺盛な活動を続けている。



©Andre Rivat

サシャ・ヴァルツ & ゲスト

『Körper ケルパー(身体)』 Sasha Waltz & Guests 『Körper』



©Bernd Uhlig